

ケインズ「美人投票論」の謎

鈴木 芳 徳

目 次

1. はじめに
2. ケインズの方法的態度
3. ケインズにおける「転換」の背景
4. 広い視野に置いてみると
5. むすび

1. はじめに

ケインズ (J.M.Keynes, 1883-1946) の『一般理論』(*General Theory of Employment, Interest and Money*, 1936) に株価にかんする「美人投票論」と称される説明がある。それがいかに恣意的なものであるにせよ、投資家の一般的な意見に耳を傾けざるをえないものとして投資家というものを見ようというのである。

ケインズの叙述を引いておこう。

「また、比喩を少し変えていえば、玄人筋の行う投資は、投票者が100枚の写真のなかから最も容貌の美しい6人を選び、その選択が投票者全体の平均的な好みに最も近かった者に賞品が与えられるという新聞投票に見立てることができよう。この場合、各投票者は彼自身が最も美しいと思う容貌を選ぶのではなく、他の投票者の好みに最もよく合うと思う容貌を選択しなければならず、しかも投票者のすべてが問題を同じ観点から眺めているのである。ここで問題なのは、自分の最善の判断に照らして真に最も美しい容貌を選ぶことでもなければ、いわんや平均的な意見が最も美しいと本当に考える容貌を選ぶことでもないのである。われわれが、平均的な意見はなにが平均的な意見になると期待しているかを予測することに知恵をしぼる場合、われわれは三次元の領域に到達している。さらに四次元、五次元、それ以上の高次元を実践する人もあると私は信じている。」(『一般理論』第12章, *The Collected Writings of J. M. Keynes*. Vol. VII 塩野谷祐一訳, 東洋経済新報社)

他方、株式などの価格に関しては、通常、二種類の考え方が知られている。

第一は、資本還元、ないし資本化 (capitalization) による「擬制資本 (fictitious capital)」としての説明である。第二は、「現在価値 (present value, present worth)」としての説明である。

第一の方法は、かなり歴史が古い。サー・ジョサイア・チャイルド (Sir Josiah Child, 1630-99) は、1668年出版した *Brief observations concerning trade, and interest of money* において次のように述べている。「利子引き下げは全ての国民の繁栄と富との原因であり、この王国における利子の6%から4%ないし3%への引き下げは、20年をへずして、国民の資本を2倍にせずにはいないであろう」とし、「そのような法律が作られたのちは、彼の全ての土地は直ちに以前の2倍の価値を持つであろう。」と述べ、「その資産の過半が土地にある貴族およびジェントリは、ほどなくして彼等の所有する全ての土地財産の上に、50と書く代わりに、100と書く事になるであろう。」(ジョサイア・チャイルド、杉山忠平訳『新交易論』東大出版会、1967年、53頁) ちなみに、このことと、イングランド銀行の創設時に土地貴族の賛意が大きき力となったことは関連している。

第二の考え方は、キャッシュ・フローを割り引くことによって、その投資の現在価値を求めようとするものである。これは、J. B. ウィリアムズ (John Burr Williams) らに発する考え方で、ウィリアムズは、『投資価値の理論』(*The Theory of Investment Value*, 1938, 序文は1937年10月, Reprints of Economic Classics, Augustus M. Kelley, 1965) を著し、株式の投資現在価値を求める数式を示した。今日の全ての投資理論はここから出発している。(同書は、その第5章冒頭において、1930年9月8日号の *Barron's* における Robert F. Wiese の *Investment for True Values* なる論文から、「株式にせよ債券にせよ、証券の正当な価格は、将来所得の全額の合計を現在の利子率で割り引いたものである。」という言葉を用いている。)

これら二つの考え方相互の間には、自ずから通底するものがあるのであるが、それはここでの課題でないから触れない。ただ、後論との関係で触れておかなければならないのは、第一の擬制資本としての理解が「空間的」「場所的」な機構を問題としているのに対し、第二の割引現在価値としての理解が「時間的」な処理を旨としている、という点である。ともかく、ここで確認すべきは、こうした株価の説明が二様に可能であるにもかかわらず、ケインズはこれらを用いることをしていない、という事実である。それは、恐らくは、こうした既存の説明方法には満足することができない、ということの意味しているに相違ない。

そして、ケインズの著作の流れの中でいうと、こうした「美人投票論」に類する説明方法は、『一般理論』以前には存在しない。

以上のことからすると、なぜ、ケインズは美人投票論のような説明方法をあえてここで採用したか、その根本の理由はどこにあるか。それはケインズの方法的態度の変化に伴伴するものかどうか、これらを、ケインズが直接の影響下にあったか否かというだけでなく、やや大きな構えをもって近代思想の流れの中でその位置付けを明らかにできないものか、というのが小論の趣旨である。

2. ケインズの方法的態度

元来、ケインズの方法は、「分析哲学 (philosophy of linguistic analysis)」と呼ばれるものであった。この考え方は、1903年、G. E. ムーア (George Edward Moore) の『プリンキピア・エチカ (Principia ethica)』によって表明され、B. ラッセル (Bertrand Russell) らによって支持され発展されたものである。この考え方を裏面から説明すると、大陸のヘーゲルの観念論には批判的で、特にヘーゲルの有機的全体観を受け入れようとしないものであった。すなわち、後論との関連においていうなら、コンヴェンション、すなわちやや幅を広く取っていうなら、「伝統」とか「慣習」とか「慣行」とか「制度」とかいうものの意味を知ろうとはしない態度であった。

しかし、恐らくはこの考え方から、1936年のケインズは抜け出していた。1938年に発表された『若き日の信条 (My early Beliefs)』(「若かりし日の信条」という訳語もありうる。)は、かつての自分への強烈な批判であった。かつての考え方を翻し、言ってみれば「人々の振る舞いは全て何らかの規則に従っているもの」という見方に変わっている。こうした方法的態度の転換が、1936年の『一般理論』には含まれていたのである。それは、ここで必要な限りでいうなら、一方では、将来への不確実性(内容的にいうなら、袋の中から選び出す赤球と白球との確率分布のごときものから、ヨーロッパ大戦の勃発可能性に至るまでの不確実性を含む)の考察が深められるとともに、他方では、コンヴェンションが、社会全体のアンカーの役割を果たしていることを強く意識するようになったのである。すなわち、一言にしていうならおよそ全知的 (omniscient) ならざる人間における「不安」と「慣行」との関係性を「内側」から、また「対」のものとして明らかにしようとするものであったのである。

3. ケインズにおける「転換」の背景

もしそうだとすると、何がケインズに起ったのだろうか。何がケインズ的方法的態度を変化させたのだろうか。

これに対する確定的な解答は恐らくは存在しないであろう。現に、ケインズにおける「転換」を、かつてドイツで提起された「アダム・スミス問題 (Das Adam Smith Problem)」にならって、「メイナード・ケインズ問題 (Das Maynard Keynes Problem)」(*Cambridge Journal of Economics*, 1991, 15, 101-111)として提起したB. W. ベイトマン (Bradley W. Bateman) は、1991年に公表したその論文の末尾で、「哲学に関するケインズの業績とその経済学に関する業績とを真に結びつけた文献は、今日いまだ見出すことが出来ない。」と述べている。

近年、研究者の間では、ケインズの畏友であったヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889-1951) の思想がこの時点で大きな転換を見せていることが、興味深い事実として大きな関心を集めている。最近刊行された伊藤邦武『ケインズの哲学』(岩波書店, 1999) [『イギリス哲学研究』第24号, 2001年, に井上琢智による詳細な書評がある。] は、この照応関係を強調する。この書物

は、『確率論』から『一般理論』にいたる間における主題と方法の修正・発展を押しやうとしたものである。『確率論』に焦点をあててケインズを理解することの重要性はかねて菱山泉によって提起された。それが伊藤邦武の書物では、ターニング・ポイントを探って、『一般理論』なる書物を、不完全雇用をも視野に入れた包括性において「一般」理論であるだけでなく、むしろ人間精神をも含めた一般的で哲学的な分析から社会の特性を探ろうとしたという意味で「一般」理論であるとされるのである。(補注1)

ヴィトゲンシュタインの場合、その前期(『論理哲学論考 (*Tractatus Logico-Philosophicus*)』1922)における、私だけの言語を問題にする「言語画像論」とは異なり、後期になると同じく言語を問題にするにしても、言語の社会的意義、言語の公共性、社会的言語といった方面に関心が強まり、個々の話し手が加わる言語ゲームにおいて互いに批判しあい、教育しあって、ゲームの規則そのものを変化させてゆく「言語ゲーム」論へと重心が移行した。すなわち、人々の振る舞いは何かの規則に従ったものであり、また人々の振る舞いがその規則を作っていくと見る考え方が表明されるようになる。

では、そのヴィトゲンシュタインの考え方は、何故、ここで転換したのだろうか。これまた傍証による推測の域を出るものではないが、ピエロ・スラッファ (Piero Sraffa) の影響下にあったとするものが現れている。スラッファを通して、「貨幣」と「言語」との相似関係とか、フェティシズムとかいった問題領域が伝えられたのではないかと、いうのである。(Terry Eagleton "Wittgenstein's Friends" *New Left Review*, Sep-Oct/1982. このテリー・イーグルトンの論文は、のちに *Against the Grain*. 1986. として公刊された1書に収められている(邦訳『批評の政治学』大橋洋一ほか訳、平凡社、1986年)。この論文の中で、イーグルトンは、「歴史の奇妙ないたずらから、ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの思想は、マルクス主義芸術論の主流と、間接的にはあれ、もしかすると結びついていたのかもしれないのである。」とする。そしてバーミンガム大学古典学教授でマルクス主義者のジョージ・トムソン (George Thomson) (『古代ギリシャ悲劇に関する唯物論的研究の先駆け』) の名前を挙げ、彼がヴィトゲンシュタインと親密な間柄であったことから、彼が何事かをヴィトゲンシュタインと語ったのではないかと、している。とはいえ、この論文の執筆後イーグルトンは、トムソンから「自分はヴィトゲンシュタインと哲学を論じたことはない」という指摘をもらっていることも注記されている。また、イーグルトンは、ピエロ・スラッファに触れ、ヴィトゲンシュタインが『探求』の序の中で「長年のあいだ絶え間なくわたくしの思想について批判を行ってくれた」一人としてスラッファに感謝の意を表わし、スラッファのことを「この手稿に現れる思想のうち最も実り豊かな部分」の源泉であるとまで宣言していることを紹介している。また、Paolo Albin "Sraffa and Wittgenstein", *History of Economic Ideas*, 1998/3 を参照。また、John B. Davis, A Marxist influence on Wittgenstein via Sraffa, in Gavin Kiching and Nigel Pleasants (eds.) *Marx and Wittgenstein, Knowledge, Morality and Politics*, Routledge, 2002. は、マルクス、スラッファそしてヴィトゲンシュタインという考え方の流路を克明に追跡している。ま

た、同じ書物に収録されている Keiran Sharpe, *Sraffa's influence on Wittgenstein*. も、「スラッファは、ヴィトゲンシュタインにマルクスの言語と行為に関する考え方を注入する導水路のようなもの」であったのではないかと問題を提起し、さらにケインズとの交渉に言及している (p. 114-5)。また、マルクスとヴィトゲンシュタインとの関係については、決して少なくない量の研究論文が発表されている。一例を挙げれば、David Rubinstein, *Wittgenstein and Social Science, Social Praxis*, Vol. 5, no. 3-4 (1978) は、言語に関するヴィトゲンシュタインにおける social convention の意義を論じ、言語を通じて fictitious society が造り出されるとし、また idea は mode of social life の反映であるとした点に注目する。「マルクスにあってもヴィトゲンシュタインにあっても、idea の理解のためには、文化の分析が必要であるとされる。何故なら、idea は、社会的行為によって織り出されるものだからである。」とする。また、*Ludwig Wittgenstein: Critical Assessments, Volume 4, From Theology to Sociology: Wittgenstein's Impact on Contemporary Thought*, Croom Helm, 1986 を参照)

4. 広い視野に置いてみると

デカルトの「主観-客観」図式でいうと、存在するのは「唯一のわれ」だけであり、人が大勢いたとしても、それは「唯一のわれ」が単に並行的にいくつも存在するというだけのことであった。

しかしヘーゲルになると、「唯一のわれ」がいくつも存在するというだけのことでなく、それらの「相互承認」「和解」が一つの「客観世界」を形作っていることが注目される。すなわち、「われわれである、われ (Ich als Wir)」或いは「われである、われわれ (Wir als Ich)」が注目される。自己意識を持つ他人と関わる、自己意識を持つ自己、ここに単純な「われ」を越えた、社会生活を営む「われ」がある。「われ思う」として単独に主観性が機能するのではなく、互いに交錯しつつ共同的に機能するものとして主観性を捉えたときにはどうなるか、が問われてくるのである。ヘーゲルにおける「主体の『自己-世界』了解形成の論理は、常に自己とは異質な他者の存在を前提としていた。主体はいったん自己を外化 (疎外) し、それまで異質であった他者と和解することを通じて『自己-世界』了解を深化・拡大させていく道が採られたのである。」(山脇直司『包括的社会科学』, 東京大学出版会, 1993年, 186頁)

こうした考え方を一括して「間主観性 (intersubjectivity, Intersubjektivität)」と呼ぶ場合がある。E. フッサール (Edmund Husserl) の言葉になじませながら、城塚登、広松渉やイポリット (Jean Hyppolite) は、ヘーゲルの発想を「間主観性」として特徴づけている。(補注2)

以上のように見てくると、ケインズにおける「市場」や「貨幣」といったタームのそれぞれについて従来以上に慎重に吟味してみる価値があるように思える。「神の見えざる手」としての「市場」、アイドル・バランスとしての退蔵「貨幣」、これらは、それぞれに「制度としての市場」「制度としての貨幣」を観念してのものであることを示唆する。ア priori に「市場」があ

るのでもなければ、単なるボールとして「貨幣」があるのでもない。無人島に移住するに際して「貨幣」を持って行っても何の役にも立たない。自給自足や計画経済を前提すれば「市場」は存在しようがない。その意味では「貨幣」も「市場」も「仮の」或いは「かりそめ」で「虚ろな」存在に過ぎない。しかし、それがこの社会では「実」であり、これをないがしろにし無視することは許されない。市場参加者は「市場」に身を委ねざるをえないし、また「貨幣」を信認せざるをえない。私たちは、金利生活者の「貨幣愛」を簡単に馬鹿げたことと嘲笑するわけにはいかない。アニマル・スピリット（血気）が議論になる素地はここにあったのである。社会の制度というものは、元来そういうものなのである。葛藤に満ちたものとしての人間ないし人間関係が、外化し対象化したものが主体化し、これが行為主体である人間を規定してくる。この点に関してヨーロッパ社会で積み上げられてきた認識枠組みには、今日なお学ぶべきところが多いのではあるまいか。「人」は「人」との関係において「社会」という制度を形成する。ここからでなければ、その「虚」と「実」は明らかにならない。

ケインズの「美人投票論」の意味を、ここで改めて考えてみよう。株価に関していえば、擬制資本としての理解によるにせよ、あるいは投資現在価値によるにせよ、例えば $[\text{配当} \div \text{利子率}]$ という算式で株価は決まってくる。理論株価といってもよい。それが市場の仕組みというものだ。これに、将来への不安や予想、或いは不確実性といったものを加え、分母と分子を調整してやれば、いくらかは現実に近いものになってこようし、また現実をよりよく説明できよう。

しかし、ケインズの「美人投票論」はこれらとは論理次元を異にし、如何に恣意的で「虚ろな」存在であるにせよ、（自らの外部にあるものとしての）投資家一般の意見というものを予想し、これを参照し、これに依存し、これに帰依せざるをえず、これに身を委ねざるをえない投資家というものを描いてみせた。それは、およそ全知的（omniscient）とは言い難い投資主体にとってみれば、「不確実性」と「慣行」とは対になる性格のものであるからだ。「不安」と「慣行」とを対のものとして考えたことから、「美人投票論」は、生まれたものである。

すなわち、「美人」が「美人」であるのは、その人が「美人」であると平均的な人々が考える、と平均的な人々が考える、と平均的な人々が考える、からなのである。そこで選ばれる美人は、合理的に、またまじめに人々が投票すればするほど、個々人がほんらい抱いている美人の基準から遠く無限級数的に乖離する。つまるところは美人といわれているから美人である、ということになる。（岩井克人「注目集める投機的泡沫」日本経済新聞、1985年3月2日付）

それは、第一に、歴史的に不可逆的な時間というものを考えた上で、将来見通しというものを考えてみれば容易に分かることである。歴史的な時間の中では、常に未知の将来に賭けるしかなく、しかも選択をやり直すことは出来ない。しかも、経済には固有の変動がある。ビジネス・サイクルの存在が、また将来を不透明にする。そうした条件の下で、投資家は投資判断を下さざるを得ない。これは、時間軸を設定しての不透明性、不確実性の問題である。

第二に、不確実性は、個々の主体と社会との関係からも生じてくる。個々の主体が相互依存的

に判断し行動するところから、或る同一時点を前提しても、主体が他の平均的判断、平均的行動を予測することに知恵を絞らざるを得ないということからくる不透明性、不確実性がある。これは、時間軸を設定してのものとは異なり、一定の社会関係から生じてくる場所的・空間的・社会的な性格のものである。John B. Davisは、この点に『一般理論』の大きな特質を見ようとしている。それは、structure of interdependent beliefsの存在からくるものである。J. B. Davisのいうところを引いておこう。

For Keynes, therefore, economics as a moral science would naturally have this system (or systems) of interdependent belief expectations among individuals (or groups of individuals) as a primary object of investigation. (John B. Davis, Keynes's Later Philosophy. *History of Political Economy*, 27 : 2 (1995) p. 248)

In effect, in the view of individual judgment and belief that arises out of Keynes's moral science philosophy, uncertainty is, in the final analysis, less a metaphysical absolute bound up with the unknowability of the future and more a matter of a particular kind of structure of interdependent belief expectations. (p. 250)

これら二点を合わせ考えてみると、株価は、効率的市場仮説がいうように、必要な情報の全てを客観的に反映しているものではなく、むしろ、現在、或いは次の年に平均的な投資家がどう予想するか、という問いを累積的に重ねたものであることになる。株価高騰のプロセスにおいても、また歯車が逆回転した株価暴落のプロセスにおいても、そのことは顕著なかたちで示されてこよう。

それは、株価における他者依存性ともいうものに言及していることを意味しよう。もとより、長期的なファンダメンタルズの趨勢を見て投資するものもいよう。長期的に見ての理論価格というものがあり、マクロ経済の動きがあり、企業財務の分析も欠かせないものであることは言うまでもない。そして、そういうファンダメンタルズを大事にしようとする投資家が、前記のような累積過程から引き戻す力として働くことも事実であろう。しかし、株価というものはファンダメンタルズで説明しきれぬものでは決してない。わが国の株式投資の世界にある「相場は相場に聞け」という格言は、そのあたりの機微をよく伝えるものといってよからう。

この発想は、徹頭徹尾、この「現象」の場面に踏みとどまって物事を見てゆこうとする方法的態度であるということができようし、その「現象」がいかに「虚」と見えようとも、すなわちいかに「かのような (als ob)」ものであるにしても、それだけが「事実」であることは拒否しがたい、という意味が込められている。株価についていうなら、ファンダメンタルズのほうがむしろ架空の計算であり、現に存在するのは現実の日々の株価しかない、ということは深く心に留めて置くべきことであろう。これが、convention が生み出す<根拠なき合理性>の世界であり、経

済社会はその本質において、そうした不安定性を抱えている、ということの意味するのである。そして、いかに根拠なき「かのような」ものであるにしても、これに依拠することこそが合理的判断、合理的行為であるということも、また厳然たる事実なのである。

こうしたケインズの方法的態度とその変化について、ケインズの言うところに即しながら、いましばらく考えてみる。(補注3)

「ケインズの、真の信条の発見を探求する真剣さ、信条と行動との関係に注いだ知的関心の高さ、自分の行動を自分の信条に照らして正当化しようとする絶え間ない欲求などは、すべて、現在ではマルクス主義者の間に存在するだけで、事実上消滅してしまった精神構造を彷彿とさせる。」(Skidelsky, R. *Hopes Betrayed 1883-1920*, Vol. 1 of *John Maynard Keynes*. London, Macmillan, 1983 p. 147 宮崎義一監訳・古屋隆訳「ジョン・メイナード・ケインズ 1」東洋経済新報社, 昭和62年, 217頁) そのケインズにおける方法的態度のどこがどのように変化したのか。

前期, すなわち『一般理論』が刊行されるまでの時期のケインズを支配していた考え方は、自分自身ないし絶対者に対してもっぱら忠誠を誓うものであった。ケインズは『若き日の信条』のなかでこう述べている。「われわれは、順応するとか従うとかいう、道徳的責務や内面的拘束はいっさい認めなかった。神を前にして、己れの事件は己で裁くのだと、われわれは主張した。(Before heaven we claimed to be our own judge in our own case.)」(CW, X, p. 446.) すなわち、「慣習的な道徳や、因襲や、伝統的な知恵をまったく拒否した。(We repudiated entirely customary morals, conventions, and traditional wisdom.)」(前同)のである。しかも、他の人々もみな、これと同じであって、「信頼するに足り、合理的で、礼儀正しい人々 (reliable, rational, decent people) からすでに成り立っていることを信じて」(前同)いたのであり、「そういう人々は、真理と客観的基準に左右されるために、因襲 (convention) と伝統的な基準と融通のきかぬ行動のルールといった外面的拘束から安全に解放」(CW, X, p. 447.) されているものと考えていたのである。ケインズは、『若き日の信条』のこの箇所では、そうした自身のことを「不道徳主義者 (インモラリスト)」「最後のユートピアン」「世界改善論者 (meliorist)」であったと述べている。ここにいうメリオリストというのは、世界は人間の努力によって改善できるとする考え (W. Jamesら) の人々のことである。

後期, すなわち『一般理論』以降のケインズは、転換する。ケインズはいう。「われわれは、われわれ自身の人間性をも含めて、人間の本性というものを完全に誤解していた。(We completely misunderstood human nature, including our own.)」(CW, X, p. 448) すなわち、「人間の本性を合理性 (rationality) に帰した」(前同) ことが誤っていたというのである。その意味から、ケインズはかつての自身を「フロイト主義者以前 (pre-Freudian)」(前同) と断じ、「われわれは原罪 (original sin) の教義、つまり、たいいてい人間には気違いじみた、不合理な、邪悪さの源泉がある」という認識を拒否し、また、「文明というものが、ごく少数の人たちの人格と意思とによって築かれた、そして巧みに納得させられ、狡猾に保たれた規則 (rules) や因襲 (conventions) によって

のみ維持される、薄っぺらで、当てにならぬ外皮であるということに気づいていなかった。」(CW, X, p. 447) とするのである。ケインズ自身の言葉を引いてみよう。

「自発的な、不合理な、人間本性の噴出のあるもの (some of the spontaneous, irrational outburst of human nature) には、われわれの図式主義とは無縁な、ある種の価値がありうる。邪悪な振舞と結びついた感情の中にさえ、価値を有するものがありうるのである。そうして、自発的な、爆発的な、邪悪ですらある衝動から生じる価値 (the values arising out of spontaneous, volcanic, and even wicked impulses) に加えて、われわれの知っている対象のほかにも、さらに価値ある観照と交わり (valuable contemplation and communion) との対象が多数存在する。——すなわち、共同社会の間の生活の秩序と範型 (the order and pattern of life amongst communities), それらのものが呼び起こす感情、などにかかわりを持つ対象がそれである。」(CW, X, p. 449)

ケインズは、個人的な判断は頼りないものだとし、自己以外の他人の判断に頼ろうとするものだという。『一般理論』(1936) を刊行したあと、「雇用の一般理論 (The General Theory of Employment)」(1937) という論文でケインズはこう書いている。

「私たちは自分の個人的な判断が頼りないものであることを知っているのも、もしかしたらもっとよく知っているかもしれない世の中の他の人々の判断に頼ろうとする。つまり、私たちは大多数の行動、あるいは平均的な行動に合わせようとする。個々人が他人を真似しようとしているような社会の心理は、厳密には慣行的判断 (conventional judgment) と名付けられる。」(Keynes, CW, XIVp. 114)

また、利子率に関しても、ケインズは次のように述べている。

「利子率は高度に心理的な現象であるよりもむしろ高度に慣行的な (conventional) 現象であるといった方が、おそらくはるかに正確であるかもしれない。なぜなら、その現実の値は、その値がどうなると期待されるかについての一般的な見解によって著しく支配されるからである。」(『一般理論』第15章)

ここでもまた、自分と社会との相互形成的なダイナミズムが強調されている。もとより、そのコンヴェンションに基づく判断が幾重もの反省構造をもった不確定なものであり、直接的に明示的な合意の結果などではないのであるから、これに基づく判断が合理的で正確なものであるかどうかには疑問があつて当然である。根拠なき合理性に身を委ねざるをえない経済社会というものを一纏めにとらえた点にケインズ『一般理論』の特質はあつたというべきであろう。

要するに、個人の態度決定は、その属する社会に広く流布されている態度を「参照」し、これに「依存」しつつ決定されるのであるが、実はそのことがまた社会に流布する共通のコンヴェンションを形成する。つまりは「自己」と「社会」との相互形成的なダイナミズムが注目されたのであった。

かつての、前期ケインズは、合理的に判断し行動するバラバラの個人を前提としており、方法的個人主義に基盤を置いた原子論的社会観に立つものであった。自然科学にも似た方法的態度である。この時期のケインズを、B. ラッセルは「彼はいたるところ世俗の中の僧正のような気分で世界を歩き回った。(He went about the world carrying with him everywhere a feeling of the bishop *in partibus*.)」と評している。(Bertrand Russell, *The Autobiography of Bertrand Russell 1872 - 1914*, George Allen & Unwin, 1967, p. 71 日高一輝訳, 「ラッセル自叙伝」(I), 理想社, (上) 82頁)

これに対し、後期ケインズは、そうした原子論的社会観を放擲し、多数の平均的判断と行動に順応して慣行的判断を頼りに判断し行動する個人を据えたものとなっている。自然科学的ではなく、^{モデルサイエンス}道徳科学的な社会観に立つものであることが自覚的に認識されるに至っているのである。

ケインズの経済社会についての一般的な認識についていうと、ケインズは、経済を「自律的」だとは考えたが、「自己調整的」だとは考えなかった。むしろ本質的に不安定なものという認識に立ったのである。

それは、将来への「不安」と、継るものなきがゆえのコンヴェンションへの依存、そしてそのコンヴェンションの疑似性と虚構性、これらを前提とするかぎり、経済の自己調整的な性格を云々することは憚られたのである。こうした意味で、ケインズの経済学はかつての古典学派のそれとは大きく異なる質のものとなったのである。

こうした後期ケインズの考え方について、宮崎義一は次のように述べたことがある。すなわち、そもそも前期ケインズにあっては、「ケインズの『理想』(Ideal)の中から社会的行為(social action)そのものが脱落していたことを意味している。ケインズにとっては、社会的行為は単に憂鬱な義務にすぎなかった。若き日のケインズらの哲学には、この社会的行為のみならず、権力、政治、富、野心といったものを動機とする行為一般が脱落していた。それらは、理想の質を破壊するものとみなされた。」(「J. M. ケインズ問題」, 伊東光晴, 新飯田宏編『現代経済学——その現状と展望』日本評論社, 1980年, 28頁) 言ってみれば、この世の不条理と、その陰にひそむ不条理な human nature, とでもいうべきものであろうか、そこが射程に入ってきたのであろう。また、さらに、これと異なった視覚からではあるが、デイヴィス(John B. Davis, *Keynes's philosophical development*, Cambridge University Press, 1994)は、ケインズにおける「社会的関係(a social relation)」の問題として大要次のように述べる。すなわち、『一般理論』においては、個々の判断の相互依存性(interdependent individual judgment)が長期期待との関わりにおいて問題とされ、そこで慣行

(convention) が注目される。このことは『一般理論』において期待の相互依存性 (interdependent expectations) が枢要の地位を占めていることを意味している。そして「『一般理論』においては、またその後期の哲学においては、不確実性は究極的には社会的関係なのである。」(p. 108) [傍点は引用者] こうして「社会」における「個人」という問題が固有の問題として登場したのであり、翻って言えばヒューマン・ネイチャーが改めて問題として問い直されることになったのである。

5. む す び

株価に関するケインズの「美人投票論」の背後には、変容を遂げた彼の方法的態度が存在したと見られよう。そして、そのゆえにこそ、投資の合理性に関する次の指摘は重大な意味を持ってくる。

「一般に行われている遊戯の仕方に惑わされず、自分の構想できる最善の真の長期期待に基づいて投資物件を継続して買っている熟練した個人は、長い間には他の遊戯者たちからたしかに大きな利益を獲得するに違いない、という意見をさしはさむ読者があるとすれば、そのような読者に対する答えは、まず第一に、次のようなものでなければならない。すなわち、たしかにそのような真面目な心がけの人々もいるし、彼らの影響力が遊戯にふけている人々を凌ぐかどうかは投資市場に大きな相違をもたらす、と。しかし、われわれは同時に、現代の投資市場においてはそのような人々の優秀さを危うくするいくつかの要因があることを付け加えなければならない。真の長期期待を基礎とする投資は今日ではきわめて困難であって、ほとんど実行不可能となっている。それを企てる人はたしかに、群集がいかに行動するかを群集よりもよりよく推測しようと試みる人に比べて、はるかに骨の折れる日々を送り、はるかに大きな危険を冒さなければならず、同等の知力をもってするなら、彼はいつそう悲惨な間違いを犯すことになる。社会的に有益な投資政策が最も大きな利潤を生む投資政策と一致するという明白な証拠は、経験からは得られない。」(CW, VII p. 157)

上記は、「美人投票論」に続く箇所での投資についての説明であるが、その後には、「世俗的知恵が教えるところによれば、世間の評判を得るためには、慣行に従わないで成功するよりも慣行に従って失敗したほうがよいのである。(it is better for reputation to fail conventionally than to succeed unconventionally.)」(CW, VII p. 158) という実にうがった叙述がある。

かくて、ケインズが、^{モラルサイエンス}経済学を自然科学とは区別された道徳科学であることを敢えて強調する意味は慎重に吟味されてしかるべき課題である。彼は1938年にハロッド宛の手紙で、ロビンズの主張に対し次のように反論している。「ロビンズの言うところとは反対に、経済学は本質的に^{モラルサイエンス}道徳科学であって、自然科学ではないのです。(as against Robbins, economics is essentially a moral sci-

ence and not a natural science.)」(CW, XIV, p. 297)

かくて『一般理論』は、読むものにとって決して平易とはいえないものになったが、しかしまた、その幾重にも重なり合った多層的な構造のゆえに、滋味^{まじ}掬すべき作品となっていることが見逃されてはならないであろう。

しかし、以上のようなケインズ理解は、恐らく、なお浅いものというべきであろう。確かに或る「転換」が生じたことは間違いないとしても、そうした基調における「変化」を受容しうる素地がそもそもの初期から存在したに相違ない。そうであるとすれば、それなりの萌芽が初期の作品にも認められる筈である。それが外的な衝撃・影響によって全面開花したと解するほうが自然だ。そうした意味では、「連続」か「断絶」かという二分法はやや単純にすぎよう。第一次的な理解としては有益であったとしても、それでは事態の曲折の襞を十分に理解することはできない。そしてその鍵は、初期ケインズの大作『確率論』(*Treatise on Probability*, 1921)にある。その精確な読解と、それを中世以来のヨーロッパ思想の展開の中に位置付ける努力が求められる。残された大きな課題である。(補注4)

(補注1) こうしたケインズにおける方法的態度を検討するにあたっては、「ラッセル、ムーア、ラムゼー、ワイトゲンシュタインらにつながる学問論、哲学の流れを考慮しなければならない。」(安井琢磨『経済学とその周辺』木鐸社、1979年、92頁) こう問題提起した安井琢磨は、「近代経済学と論理実証主義」について語り、「ワイトゲンシュタインの哲学の形成に、われわれになじみの深い三人の経済学者——ケインズ、ラムゼー、スラッフアが絡んでいることは興味のある事実」(同書、109頁)としている。また、菱山泉「ケインズにおける不確定性の論理」(『思想』1967年4月)は、「『確率論』と『一般理論』との関係」を問題にし、「彼の初期の思想と後期の思想との交渉をたずねる」ことを目的とした作品であって、不確実性を軸にケインズの経済思想の変化を読み取ろうとした先駆的な作品である。やや後の公刊になるが、菱山泉『スラッフア経済学の現代的評価』(京都大学学術出版会、1993年)は、ケインズを主題とするものではないが、諸所においてケインズの所説に触れるところがある。さらに、塩野谷祐一「ケインズの道徳哲学——『若き日の信条』の研究」(『季刊現代経済』臨時増刊、52号、1983年)は、ブレイスウエイト(Richard Braithwaite)との関係でケインズの思想を明らかにしようとしたものである。また、1984年の『価値理念の構造』(東洋経済新報社)において塩野谷祐一は、「新古典派によれば、人間は将来について十分な情報をもっており、少なくとも確率的に将来を予見できると考えられていた。このような人間は将来について保険数学的な計算を行い、数学的期待値を基礎にして行動する。ところがケインズによれば、将来についての情報はきわめて不完全であり、したがって人間は血気や衝動に従っていちかばちかの行動を行ったり、慣行や惰性に従うというあやふやな基礎に立っている。ケインズは不確実性の中の人間像によって新しい貨幣の理論に到達したのである。」(12頁)としている。なお、Y. Shionoya, "Sidgwick, Moore and Keynes: A Philosophical Analysis of Keynes's 'My Early Beliefs'". (in *Keynes and Philosophy*, ed. by B. W. Bateman & J. B. Davis, Edward Elgar, 1991) 間宮陽介「モラル・サイエンスとしての経済学」(ミネルヴァ書房、1986年)は、「ケインズが、そしてことにタウンシェンドが力説するのは、諸価格の安定化、とりわけ貨幣賃金水準の安定化は市場機構の中で自律的に達成されるのではなく、市場機構の外部にある、とはいえ貨幣経済システムにとってはその内部にある慣習の力によって成し遂げられる、ということである。」とし、「タウンシェンドやケインズに従えば、貨幣経済はある種の慣習をみずからの中に持つことによって一つのシステムとして成立する経済である。このことは『一般理論』の全編を通じて陰に陽に主張されているにもかかわらず、その後のケインズ解釈では全くといっていいほどに無視されてしまった。」(同書、84

頁)として、「慣習の安定性」について一節を割いて論及する。遡れば、西部邁『ソシオ・エコノミクス』(中央公論社, 昭和50年)は、「功利主義の新古典派経済学を経由して形式主義の現代経済学へ受け継がれてきた最も基本的なもの、それは方法論的個人主義と経済的合理主義、すなわち経済人(ホモ・エコノミクス)の仮定だと思う。」とし、これに訣別すべきことを宣言して「経済人であると同時に社会人でもあり心理人でもあるような」主体を採用することの意義に及び、この観点から、ケインズを含む諸説の位置づけを試みている。(同書, 15, 33頁)また、西部邁『ケインズ』(岩波書店, 1983年)は、ケインズがそれまでの経済学における「個人によるベンサム的な快樂計算そしてワルラス的な調整過程という多分に機械論的な仮構」から離れて「未来への期待と過去からの惰性を担って行為する個人や集団」を見つ、「何が起るかよく分からないという意味での不確実性、つまり人間の無知にもとづく不確実性」に光を当て、「慣習の頼りなさ」と「惰性の重さ」とが併せて論じられており、特に「絶え間ない変化につれて慣習が動揺し、そのことによって、到達さるべき平衡点が不断に移動する。」ものであることに目が及んでいる、としている。(同書, 158, 169, 180, 187頁)また、宮崎義一「J. M. ケインズ問題」(伊東光晴, 新飯田宏『現代経済学——その現状と展望』所収, 日本評論社, 1980年)は、「若かりし日の信条」に注目し、ハロッド、スキデルスキー、モグリッジらによりながら、ケインズのいう「道徳」と「宗教」の差異に言及し、若き日の「ケインズの『理想』の中から社会的行為(social action)が脱落していた」のであって、「社会的行為のみならず、権力、政治、成功、富、野心といったものを動機とする行為一般が脱落していた。」とし、この省察から、「ベンサム主義的伝統からの離脱」が図られるに至った、としている。そしてその転機として「ケインズの恋愛、結婚とブルームズベリー・グループからの離脱」をとりわけ重視している。さらに、宮崎義一追悼集『温かい心 冷静な頭脳』(2000年)に収められた遺稿では、更に確率論に説き及ぶ議論の流れが見られる。

伊藤邦武『ケインズの哲学』(岩波書店, 1999年)は、ケインズにおける「自己批判と転換」を明示的に課題としたものであって、その論点は次のように示される。「彼(ケインズ)はここでは、われわれの判断が規約[コンベンション]の束の中で発動し、その判断の交換される市場が不安定性をかかえるまま機能していることを、一つの『歴史的事実』として了解し、それを『われわれの生の形式』としてそのまま認める視点をとっている。」(106頁)そこでの「判断」と「コンベンション」とは、相互形成的でダイナミックな関係にあり、そのダイナミックな動きの中で重心が移動する。「個々の人間はその了解する規約[コンベンション]に基づいて判断し、同時に共同体の平均的な判断の動向を予測しつつ行動するが、その行動の全体がまた、より広い歴史的な地平のなかで新たな生の形式を形作っていくということ——これはまさに後期ウイトゲンシュタインの『言語ゲーム論』の経済版ともいべき判断論、あるいは行為論にほかならない。すでにみたように、『一般理論』の成立と前後する時期のウイトゲンシュタインは、その前期の『言語画像論』、すなわち、『永遠の相のもとで』個々の事実を描出する『私だけの』言語という理論を放棄して、生の形式を共有する共同体のもとで、個々の発話者が個別的な言語ゲームに参加し、その実践においてたがいに批判しあい、教育しあって、ゲームの規則そのものを変化させていく、という新たな思想を構築しつつあった。」(107頁)ここに示されるように、ケインズとウイトゲンシュタインとの間には「同一の精神科学が共有されているのである。」(196頁)他方、平井俊顕『ケインズ・シュムペーター・ハイエク』(ミネルヴァ書房, 2000年)は、ケインズが制度学派の歴史観に親近感を感じており、「制度学派の代表者コモンスを引き合いに出して、その歴史観を全面的に受け入れた記述を行っている。」ことを指摘し、「ケインズの論点は、制度学派の歴史観・社会観と驚くほど類似している。」と述べている。(198頁, 200頁)ただし、平井俊顕『ケインズの理論』(東京大学出版会, 2003年)は、ケインズの哲学的背景の変化と経済学における変化との照応関係を強調する伊藤邦武の主張に関連して、「『一般理論』をそのようにとらえることの適切性には慎重でありたいと思う」(157頁注22)と留保し、「『哲学者』メイナードがどのように変化したのかという問題自体は、すこぶる興味深い。しかし、私にはメイナードが哲学的に変わったにせよ、変わらなかったにせよ、そのことが『経済学者メイナード』に大きな影響を与えたとは思えない(このような見解を表明する研究者にベイトマンがいる。)」(158頁)としている。

前記のようにケインズとウイトゲンシュタインとの関連性がとくに注目されるようになるのは、ハロッド

の『ケインズ伝』が刊行されて以来のことであり (R. F. Harrod, *The Life of John Maynard Keynes*, 1951 塩野谷九十九訳, 東洋経済新報社, 昭和42年), また, レイ・モンクのワイトゲンシュタイン伝が公刊されて以来のことである。(Ray Monk, *Ludwig Wittgenstein—The Duty of Genius*, 1990 岡田雅勝訳『ワイトゲンシュタイン—天才の責務』(1)(2) みすず書房, 1994年)

ケインズの哲学的側面についての研究が, 欧米において, 1980年代中ごろから急速に進みつつあり, 「ケインズの初期の哲学思想 (中年期にはワイトゲンシュタインとの親交もあった) の研究や, それと彼の経済学を含めた諸活動との関係についての研究が, 一種の流行のように広まっている。」(スキデルスキー, 浅野栄一訳『ケインズ』岩波書店, 2001年, 訳者あとがき, 267頁) Sheila Dow & John Hillard は, 「1980年代中ごろから, ケインズを哲学者=経済学者 (philosopher-economist) として再評価しようという思想のはっきりとした流れが生まれた。」と書いている。この新しい流れは, 初期ケインズの確率論と後期ケインズの経済学との間の関係を取り上げたが, 論点はさらに広がりを見せ, 現代における経済政策を考えるに際して人間をどのような文脈において捉えるか, という問題に至っている。すなわち, こうした論調の陰には, 現代の経済学への鬱勃たる不満と不安そして幻滅があり, 一連の議論は, そこから改めて哲学的ないし方法論的な深みに立ち戻って議論しようとする空気が生じたことによって支えられている。同時にまたポスト・ケインジアンへの期待があることも見逃せない。(Cf. Sheila Dow & John Hillard (eds.), *Keynes, Knowledge and Uncertainty*, 1995, Edward Elgar, p. xxiv) さしあたり, ケインズの読解そのものについていうと, ケインズの『確率論』と『一般理論』との間に連続を見るか, 断絶を見るかで両様の意見がある。おおむねのところ言えば, 断絶 (discontinuity) を見るものとしては, バイトマン (Bateman, B.), デイヴィス (Davis, J. B.), コットレル (Cottrell, A.) ら, 他方, 連続 (continuity) を見るものとしては, キャラベリ (Carabelli, A.), ロウソン (Lawson, T.), オドンネル (O'Donnell, R. M.) らがある。やや形式的に単純化して言えば, 断絶を見るものは, 『一般理論』は『確率論』とは別の方法論的な, 或いは哲学的な手法を加味して理解されるべきもの, と見るのに対し, 連続を見るものは, 『確率論』の展開ないし深まりをもって『一般理論』を読もうとする。ただ, ここで特に注意しておきたいのは, いずれの観点とも, ケインズの考え方が新古典派とは相容れないものであることが, 検討が深められるにつれて, 従来以上にくっきりと描き出されつつあることの重要性である。

管見の限りで, 上記の各論者の主たる論稿を掲げておく。

Bateman, Bradley W., Das Maynard Keynes Problem, *Cambridge Journal of Economics*, 1991, 15, 101-111

Bateman, Bradley W., G. E. Moore and J. M. Keynes : A Missing Chapter in the History of the Expected Unity Model. *The American Economic Review*, December 1988, vol. 78 NO 5

Bateman, Bradley W., *Keynes's Uncertain Revolution*, The University of Michigan Press, 1996

Davis, John B., Keynes's Later Philosophy, *History of Political Economy*, 27 : 2, 1995

Davis, John B., Keynes on Atomism and Organicism, *The Economic Journal*, 99, December 1989, 1159-1172

Davis, John B., Keynes's Critiques of Moore : philosophical foundations of Keynes's economics, *Cambridge Journal of Economics*, 1991, 15, 61-77

Davis, John B., *Keynes's Philosophical Development*, Cambridge University Press, 1994

Davis, John B., The Locus of Keynes's Philosophical Thinking in The General Theory : the concept of convention, in *Perspectives on the History of Economic Thought*, Volume Ten, edited by Karen I. Vaughn, Edward Elgar, 1994

Carabelli, Anna, Keynes on Mensuration and Comparison, in *Perspectives on the History of Economic Thought*, Volume Ten, edited by Karen I. Vaughn, Edward Elgar, 1994

Carabelli, Anna, Uncertainty and measurement in Keynes : probability and organicness, in *Keynes, Knowledge and Uncertainty*, edited by Sheila Dow and John Hillard, Edward Elgar, 1995

Carabelli, Anna, Speculation and Reasonableness : A non-Bayesian theory of rationality, in *Keynes, Uncertainty and the Global Economy*, edited by Sheila C. Dow and John Hillard, Edward Elgar, 2002

Lawson, Tony, Uncertainty and Economic Analysis, *The Economic Journal*, 95, December 1985, 909-927

Lawson, Tony, Economics and Expectations, in *Keynes, Knowledge and Uncertainty*, edited by Sheila Dow and John Hillard, Edward Elgar, 1995

O'Donnell, Rod M., The Unwritten Books and Papers of J. M. Keynes, *History of Political Economy*, 24: 4, 1992

また、水原総平「ケインズの哲学と経済学」(『経済セミナー』、1998年8月から2000年8月まで、11回連載。途中に隔月の部分などあり)は以上のような、欧米における論調を概観するのに有益である。①1998年8月, Jochen Runde 「『確率論』と『一般理論』とのあいだ」、②1998年10月, Bill Gerrard, 「ケインズの不確実性」、③1998年12月, John B. Davis, 「ケインズの哲学的思考」、④1999年2月, Donald Gillies, 「『一般理論』における確率と不確実性」、⑤1999年10月, Tony Lawson, 「ケインズの実在論者志向」、⑥1999年12月, Anna Carabelli, 「蓋然性論理としての経済学」、⑦2000年2月, Ted Winslow 「ケインズの経済学の基盤(上)」, ⑧2000年3月, Ted Winslow 「ケインズの経済学の基盤(下)」, ⑨2000年5月, Bradley W. Bateman 「ケインズと哲学の終焉(上)」, ⑩2000年6月, Bradley W. Bateman, 「ケインズと哲学の終焉(下)」, ⑪2000年8月, 水原総平「ケインズの慣行とは何か」。

スキデルスキーは、こうした論争を見ながら、『ケインズ』(1996)の第2章「ケインズの行為の哲学」の冒頭を次のような言葉で始めている。「ケインズの経済学は、ケインジアンと異なり、哲学的な背景を持っていた。それは『善なる人生』についての彼のヴィジョンが吹き込まれ、また、蓋然性理論によって香気を付加されていた。これらの哲学的な基礎は彼の生涯のうちの若い時代に形成されたものである。まず哲学があり、その後に経済学が彼の関心の対象となった。すなわち目的の哲学は手段の哲学よりも前にあったのである。」「基本的に重要なのはケインズの直感主義的な認識論であった。彼は、感覚的な経験よりもむしろ直感を、倫理的な知識をも含めた知識一般の基礎と捉えた——これはプラトンにまで遡りうる伝統的な姿勢であった。」そして、近年になって彼の蓋然性理論が注目されており、それは「経済行為を理解する上で彼の哲学がもっている重要性にますます多くの理解の目が向けられるようになってきたことの一つの現れである。」スキデルスキーは、Anna Carabelli, R. M. O'DonnellそしてA. Fitzgibbonsを引用しながら、次のようにいう。すなわち、その際の論点は、3点あるのであって、第一に「ケインズの蓋然性理論の認識論上の位置づけ」であり、第二に「『蓋然性論』と『一般理論』との間での認識論上の連続性」であり、第三に「ケインズは『一般理論』においては、投資活動を合理的なものとして見ているのであろうか」という問題である。しかし、スキデルスキーは、これらの問題に積極的な解答を示してはいない。(Robert Skidelsky, *Keynes*, Oxford University Press, 1996. 浅野栄一訳『ケインズ』岩波書店, 2001) 同書の「訳者あとがき」では、問題の焦点が次のように整理されている。すなわち、「彼の初期に形成された哲学思想がそのまま彼の後期の経済学やその他の社会活動にも適用されていたのか、それとも彼の哲学思想には前期と後期との間で発展があり、たとえば理論革命を生じさせた『一般理論』の背後にあるのは初期のものとは異なるものであるのか、ということである。」(訳書, 267頁)

(補注2) この「間主観性」(Intersubjektivität, intersubjectivity) (また、相互主観性、共同主観性とも訳される) という用語自体は、元来、フッサール (Edmund Husserl) の現象学におけるものであって、主観と客観との対立を克服する試みにおいて使用された独特の用語である。この間主観性なる課題を通して、他者との断絶性と自己の脆さとにわれわれは気づかされる。「私」が「唯一のものであるかぎり、原理上それは他の唯一のものを許容しえない。」「デカルトの発見した私がこの唯一のものであるとすれば、複数の私たちはこの唯一のものにとってはそれ以外のものすなわち他者であらざるをえない。」「こうしてフッサールにあっては他者問題は一個の逆説として姿を現す。」(斎藤慶典「他者の現象学の展開」岩波講座『現代思想』6『現象学運動』1993年, 149頁) こうしたフッサールの思考を、城塚登は次のように解説する。「この世界は、フッサールによると、間主観的世界でもある。」「環境世界は、相互に交わり合う多くの主観の結合した社会的な主観性の世界であり、それと相関する社会的客観性の世界である。この間主観的に構成される高次の

世界が、真の意味で客観性をもつとされてきたのである。」(「人間の弁証法的存在構造——現象学と弁証法」, 城塚登編『講座哲学(3)人間の哲学』東京大学出版会, 1973年, 34頁)そして城塚はフッサールをヘーゲルとの関連で次のように捉える。「フッサール自身, 内面的反省を徹底していった結果, 最後に『生活世界』の問題にぶつからざるをえなかったように, 現象学はわれわれが生活している世界の構造という問題にぶつかり, その方法の根本的反省を余儀なくされているように思われる。その反省はフッサールのいう『問主観性』の成立根拠への反省と深くかかわっており, その限りヘーゲル哲学へと立ち戻って考究することを必要としているのである。」(城塚登『ヘーゲル』講談社学術文庫, 1997年, 446頁)

そのヘーゲルを称揚した一人がマルクスであった。マルクスは, 次のように述べてヘーゲルを評価する。「現象学が人間の疎外を——人間がただ精神という姿で現れているにすぎないとはいえ——しっかりとつかんでいる限り, 現象学のなかには批判のあらゆる契機が隠されており, しかもすでにしばしばヘーゲルの立場をはるかに超えた仕方で, 準備されまた仕上げられて横たわっている。」(『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳, 岩波文庫, 199頁)そこでヘーゲルの方法について確認しよう。

ヘーゲルにあっては, 「われわれとしての, われ」が目される。また, 「われとしての, われわれ」が目される。すなわち, 自己意識をもつ他の人間と関わる, 自己意識をもつ自己, ここに単純な「われ」を超えた, 社会生活を営む「われ」がある。ヘーゲルの前にあった問題は, デカルト以来の「主観—客観」図式であり, 他者の認識をいかに位置づけるかであった。「われ思う」として主観性が単純に機能するのではなく, 互いに交錯しつつ共同的に機能するものとして主観性を捉えたときにはどうなるか, が問われたのである。そのヘーゲルを読解したイポリット (Jean Hyppolite) は, このところをフッサールの用語である「問主観性」という用語を借りて, 次のように説明する。「ヘーゲルが到達しようとしている普遍的な自己意識は, カントの〈われ思う一般〉ではなくて, 問主観性としての, すなわち〈われわれ〉(この〈われわれ〉のみが具体的存在である)としての人間の実在なのである。」(イポリット, 市倉宏祐訳『ヘーゲル現象学の生成と構造』下巻, 岩波書店, 1972-73年, 8頁)すなわち, 「ヘーゲルの『精神現象学』における主体の『自己—世界』了解形成の論理は, 常に自己とは異質な他者の存在を前提としていた。主体はいったん自己を外化(疎外)し, それまで異質であった他者と和解することを通じて『自己—世界』了解を深化・拡大させていく道が採られたのである。」(山脇直司『包括的社会科学』東京大学出版会, 1993年, 186頁)再びイポリットの言を借りると, 「個別的なる自己意識は, 承認のための争い, 主と奴との対立, そして不幸なる意識(これは, 自分の主観性を外化することによって, われわれを理性にまで導いた意識であった)といった段階を経て, 普遍的なる自己意識へと高まったのである。」(イポリット, 前出訳書, 3頁)こうしたヘーゲルの到達点は, ドイツ・ロマン主義への批判としての意味をもっていた。伊坂青司はこの点を次のように説明する。「われわれはヘーゲルがこのような外化の論理を, 自己と他者との関係という相互主観性の問題として論じていることに注目しなければならない。彼がロマン主義的な意識を批判するとき, 自己と他者との相互連関, すなわち自己意識が互いにその中へと巻き込まれざるを得ない相互性の論理が, 近代における人間存在を成り立たせる前提として読み込まれている。その相互性とは, 自己が他者に対して自分の自立性を主張すると同時に, 他者の自立性をも承認するという, 自己と他者との相互承認の関係を意味している。ところがロマン主義的な意識は, 他者との相互的な交わりを拒絶して, ただ自分の魂の絶対的な『自己確信』に固執する。そのために外化を欠いた脆弱な意識は, <他者のうちに自己を, 自己のうちに他者を見る>という相互承認関係にまでは至ることができずに, その結果, 自らの『自己』という意識の統一さえ解体してしまうというのである。」(伊坂青司『ヘーゲルとドイツ・ロマン主義』御茶の水書房, 2000年, 196頁)また, 広松渉は, マルクスの哲学的な構えについて次のように言う。マルクスの「哲学的構えの重大な特質の一つとして, 今日風に言えば, 問主観性の自覚に人は注目しなければならない。それは, ヘーゲル式に言えば, 我々としての我, 我としての我々, Ich als Wir, Wir als Ichということになろうが, しかしマルクスの問主観性概念は彼の関係主義的な意識概念とも照応する。」(広松渉『ヘーゲルそしてマルクス』青土社, 1991年, 267頁)そしてまた, 「人々の問主体的な対象関与的活動の或る総体的な連関体が, 当事者の日常意識には, あたかも物どうしの関係ないしは物の性質ひいては物的対象性であるかのように映現するという, このフェア・ウンスな事態, それがマルクスの物象化なのである。」(「この物象化された問主観的

関係・共同主観的形象によって、“観念的”“規範的”にも拘束される。」(広松渉『物象化論の構図』岩波書店、1983年、66頁、119頁)かくして「包括的な社会哲学は、人間の『自己—他者—世界』了解という根源的な問題を排除できないどころか、逆にその『根源的』な問題によって支えられる。」(山脇直司『包括的社会哲学』東京大学出版会、1993年、5頁)

かくて我々は、マルクスやケインズを包み込みつつ流れ来たったヨーロッパ思想の大河のごとき流れを眼前にする。とはいえ、これまでのケインズについての扱いは、初期ケンブリッジ哲学との交渉に限定されすぎるくらいがあり、より広範なヨーロッパ圏の知的営みの中に位置づける試みに欠けるうらみがある。ケインズの著作や書簡を見ると、ごくさりげない調子で例えばルソー (Jean-Jacque Rousseau) の一般意思 (general will) が語られ、フロイド (Sigmund Freud) やヴィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) の思想に触れられる。そうした西欧思想の流れの中に置いてケインズを見るという観点は、今後の読解に当たって留意すべきところのように思われる。

(補注3) こうしたケインズの経済理論体系における転換点、具体的にいつであったかが議論に上っている。ベイトマン (B. W. Bateman) は、その著書 *Keynes's Uncertain Revolution*. The University of Michigan Press, 1996 の第5章で、いくつかの契機を指摘しつつ、『一般理論』に至る体系の深みに変化が及んだのは、1933年秋のことではないか、としている。なお、このベイトマンの書物についての紹介が鈴木典夫によってなされている。(『経済学史学会年報』1997年) また、ベイトマンの所説は、既出の「ケインズと哲学の終焉」(『経済セミナー』2000年5月及び6月)においても知ることができる。また、鈴木典夫「ケインズ『一般理論』における問主観の問題」(『福岡教育大学紀要』第50号、2001年)。

(補注4) やや先走ったかたちではあるが、ここに存在する大きな課題について若干を記しておきたい。ケインズの場合、かなり早期から功利主義への批判的認識がある。功利主義に基づく市場観に立つときには、全てを市場機構に投げ込むことによって効率的な資源配分が可能となると考える。この場合、市場における需給に全てが賭けられる。他方、経済社会を、単一の「一層」の市場とみるのではなく、市場機構とその外側の流通外貨幣 (アイドル・バランス) の世界との「二層」構造のトータルとして捉える場合には、単なる功利主義的市場観は退けられ、代わって経済社会の全体が信用機構として捉えられる。何故なら、この場合には下層に位置する市場機構の不具合が想定されており、恐慌を含む産業循環のプロセスにおいて市場機構の破綻という深淵が議論の中に組み込まれているからである。ここでは、credit ないしは confidence といった、単なる市場機構では求められることのない扱いが必要になる。

こうした両者の間には、倫理観の相違 (功利主義原理を採るか否か) があるとともに、経済社会を「一層」において把握するか、「二層」において捉えるかという経済社会の構造的認識の相違があることが見逃されてはならない。

ケインズの場合、既に『確率論』の段階において、パスカルに接しており、ここにおいて人間理性の有限性を識り、ひとの織り成す経済社会における「問主観性」への着目があったと見るべきであろう。とはいえ、それは経済社会観に伏在する最深部底流ともいうべきものであって、明確かつ明示的なかたちのものとして直ちに表出されたのではなく、また後年に向けて一直線に開花してゆくものとも考えられず、後年に全面開花する可能性をいうことができるに過ぎない。

また、これらの諸点との関連において、スティグリッツ/グリーンワルドによる『新しい金融論』(Stiglitz, J. E. and Greenwald, B., *Toward a New Paradigm in Monetary Economics*, 2003) が、「有事の」金融論、すなわち銀行倒産、債務不履行を視野に入れた金融論たるべきことを標榜し、「信用」の理論を建設しようとしていることは興味深い。そこでは市場機構の不具合そのものが痛切に認識されている。

(2004/04/07)